

# 信濃教育

## 巻頭言

### きれいな手

山間の小さな中学校に私は務めていた。三〇年以上前の話である。きれいな花壇を全校で作っている学校だった。中心になるのは生徒会の造園委員会。副委員長のNさんは、花壇作業で土まみれの毎日である。水をやり、雑草を取り、乾燥した葉やしおれた花を取り除くその姿は、花に語りかけているようにも見える。

ある日、Nさんはいつものように五、六人の女子と一緒に下校していた。途中お互いの手を見せ合おうということになった。中学生の女の子たちである。軽い会話の中でそんなことになったのだろう。女の子達は、お互いに手を見せ合って、細いとか、色が白いか、そんな話で盛り上がったようだ。

Nさんは自分の手を見せるのを躊躇した。毎日の作業で皮膚が荒れた手である。肥料でかさかさになり、爪の間に入った土はなかなかとれない。躊躇しながらも、他の子の声に押されてNさんは自分の手を見せることにした。その時のことをTさんが生活記録に綴った。

「Nさんの手を見た時、私は涙があふれそうになった。Nさんは私たちがテニスをしている時にも、作業をしている。毎日作業をしている。そのことは知っていたけれど、こんな手になるほど大変だとはちっとも知らなかった。でもNさんは笑顔で手を見せた。私はもう一度Nさんの手を見た。じっと見ていると、その手が本当にきれいな見えてきた。」

私は、Tさんの日記を読んだ時の感動というか衝撃を今でも忘れない。造園委員会の副委員長になるように言われたときのNさんの少しためらった表情。朝夕の作業は大変だろうが笑顔絶やさないNさんの日々の生活。Nさんの荒れた手をきれいだと感じるTさんの感性。そんないろいろが私の中ではじけたのだろうか。

こういった子どもたちのおかげで、私は教員人生をまっとうできたのだろう。